

# 最前線

# 国際水準の労働環境で地元人材育てる

丸和繊維工業の青森工場、アプティマルワは国際的な高い水準の労働環境を強みに、縫製業には珍しく安定した人材を確保している。世界のスポーツブランドから数多くの認定を受けていることでも実証済みだ。あえて経験者を探らず、地元の若手を中心に多能工の育成に力を入れる。本業以外でも地域の活性化に向け、産学官連携による藍の研究・開発に取り組んでいる。

## 丸和繊維工業の青森工場

## アプティマルワ

09年に移転・新設した工場は青森の市街地にあり、周辺には住宅地や小売店が並び、通勤の便もよい。外壁2面に太陽光発電のパネルを付け、工場の電力の一部をまかなう環境配慮型の建物だ。

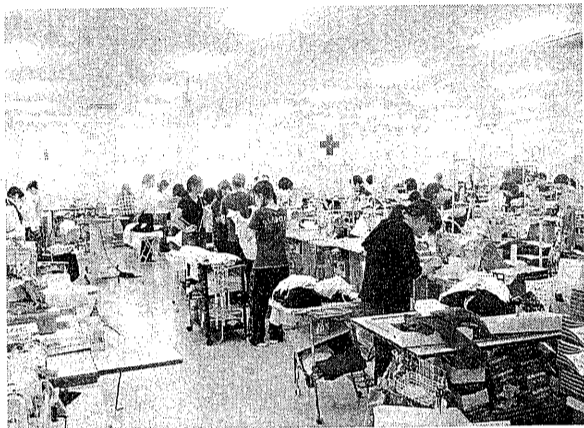
### 人材は心配ない

新工場の設計にはCSR(企業の社会的責任)の進んだ大手スポーツブランドの指導・意見も取り入れるとともに、従業員にアンケートを実施して要望を聞く徹底ぶり。働く女性に優しい環境で、調理人が昼食を作る大きな食堂をはじめ、シャワールームや化粧室、小物用個人ロッカーなどがある。作業スペースには天井に加湿器、ガス式の床暖房を備える。認定工場になるためには、労働条件・待遇はもちろん、消防法などの厳しい基準をクリアしている。非常口や消火器の設置数は日本の法基準の2倍で、避難訓練の実施、災害時連絡網の整備などチェック項目は多岐にわたる。欧米ブランドによる本国の監査では報告書だけで

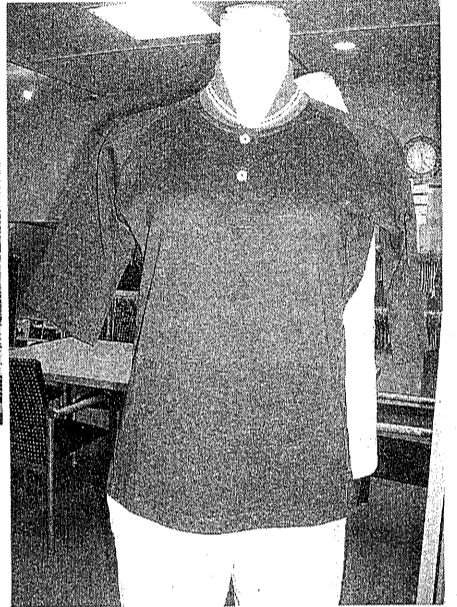
なく、育児休暇やサービス残業の有無などを従業員に直接個人面談して確かめられる。従業員127人は地元100%。「地元との信頼関係が強いので、人材確保の心配はない」(吉田久幸アプティマルワ社長)と断言する。高等学校に募集をかければ、新卒者は必ず採用できる。ペーパーテストや適正試験を続けており、この20年間、毎年5人前後、新卒者を採用している。基本的に経験者は採用しない。そのため、従業員の平均年齢は縫製ラインが20代、全社でも30代と若い。服装は自由で、工場内のBGMは若手が選ぶなど自主性を重んじる。

### 短期に即戦力

「誰がやっても同じようにできる工場」が信条。従来、ベテランしかできないようなことを新人でもできるように教育している。20年ほど前の操業当初から経験者がいなかった。最初は茨城県にあった旧工場でも7、8人が1カ月間研修したところから始まった。「経験がないので悪い常



若手従業員が活躍する縫製の現場



山崎直子宇宙飛行士の船内被服に選ばれた「動体裁断」によるポロシャツ

## 安定操業に優位性発揮

識や癖がない分、他社ではちゅうちょするような難しい仕事にも先入観なく挑める」(吉田社長)の強みだ。新卒の教育には昔は3カ月かかったが、今は2週間もあれば十分。いかに短期間に即戦力になれるかを追求してきた結果だ。CAD(コンピューターによる設計)の担当者は入社1年だという。縫製ライン(1ライン約10人)は立ちミシンの一枚流しが基本。布帛は座りミシンによるパーツ専門で熟練化しがちだが、カットソーは作業の平準化が重要なため多能工によるチームワークが大切になる。通常ならベテランが担当する旧式のフラットシーマでも若手を活用する。ラインの段取りやミシンのセッティングなどの力仕事も女性が使

やすいように設計されている。縫製スタッフはミシンのアタッチメントも自ら改良し、工程ごとの時間管理や中間でのチェックなどを自主的に行う社風を心掛ける。

### デザイン物中心

同社が手掛ける商品はスポーツやカジュアルメーカーのカットソーが中心。とくにレディースのデザイン物が多い。国内に求められるのは緊急対応や他にできない難しいものばかりで、単純な量産品はない。最大で月産3万枚以上の能力があり、年間15万枚前後を生産する。最近では布帛とのコンビや布帛の代替品が増えている。自社のファクトリーブランドとして開発した「動体裁

断」によるニットシャツ(いわゆるピズポロ)のレディース版も作っている。また、動体裁断を活用したポロシャツは宇宙飛行士・山崎直子さんの船内服として選ばれた。これは、吉田社長が理事長を務めるあおもり藍産業協同組合と弘前大学、青森市など産学官連携による共同開発の成果だ。地域資源の活用を目的に藍の成分を研究して商品開発を追求する。

●企業メモ  
所在地=青森市大字三内字稲元85の4  
操業開始=1991年  
事業内容=ポロシャツなどニット・カットソートップの製造  
親会社=丸和繊維工業(東京・墨田)

### 日本の縫製業がめざす方向

「こんな街中に工場が」と驚き。建物内が非常にきれいなことに再度、驚いた。自慢の食堂をはじめ、従業員満足度を最優先した結果が表れている。縫製業を担う女性のための配慮が隅々にまで行き届いている。地元からの信頼も厚く、地方の縫製工場の課題である

人材確保でも優位性を発揮する。高い技術や品質管理、納期厳守はもちろんだが、CSR先進国である欧米のブランドの厳しい基準をクリアした労働環境作りは、これからの日本の縫製業が目指すべき方向だろう。(大竹清臣)

### チェックポイント

### ▶動体裁断 ファクトリーブランドに生かす

機能系被服デザインの中澤愈氏が人体解剖で人間の皮膚を分析して考えた。立体裁断をさらに進化させて四次元的動体に基づく衣服設計。体の動きにフィットしながら運動を妨げず、着用時に引きつれを感じさせない着心地を実現した。動体裁断で作ったシャツは体のラインをすっきりとくみせつつ、腕を上げ下げしてもパツパツにインした裾がまっすぐたわまないのが特長だ。この技術を生かしたファクトリーブランド「インダスタイル・トウキョウ」はカノコなどジャージーを使用しているためタイトなフィットでも伸縮性があり、ストレッチフリー。通常よりも立体的で曲線がきついため、高い縫製技術が必要になる。同ブランドは東京都墨田区の一すみだモダンにも認定された。

### いとでんわ

### ●一宮地場産業ファッションデザインセンター

ウールを中心としたテキスタイルを製造している愛知県尾張西部地域(尾州産地の大部分)の地場産業振興を目的として一宮市を中心とした地方自治体が運営母体を構成し、84

年に開設した。産地の中心である一宮市にセンターを置き、ファッションや物作り、マーケティングなどの情報収集と提供、新商品の開発、人材養成などの

### 尾州の活性化へ多くの取り組み

振興事業、とりわけファッション情報の収集・提供事業に力を注いできた。他方で、仏ネリーロディとの契約による欧州トレンドを取り入れた素材開発チームの推進、一宮市でのヤーン展「ジャパン・ヤーン・フェア」、東京での「尾州マテリアル・

エキシビション」などの主催者として、商談の活性化にも一役買っている。尾州産地の物作りや販売などで欠かせない軸として機能しており、今後も毛工連やザ・ウールマーク・カンパニーなどの団体とも連携しての活発な活動が期待されている。



一社長  
さん  
71年朝日  
企画、営業な  
ら社長。

ナーや欧米ブランドからも引き合いが続いている。新たな商品を生み出すには機械の開発・改造まで必要で、数年前に工場も拡大した。自ら

育成を  
当社は宮崎県と福島県に合  
わせて四つの自社工場を持  
ち、以前から国内生産を重視  
してきました。昨年の国内生  
産比率(雑貨を除く)は「ア

工場の大半は長くお付き合い  
させていたため、信頼  
関係もできています。これら  
が品質の安定に結びついて  
います。納期についても、国内

少と技術者不足です。「コスト  
競争では、もはや日本の工場  
は海外に勝てません。テキス  
スタイルなどを含め、付加価値  
で負けない物を作っていくこ